

仏教に基づく道德教育と人間形成

第4回：幼児期の道德教育と宗教教育

同朋大学
岩瀬真寿美

- 幼児教育と宗教の関わりについて知ることができる。
- 信頼関係、「大いなるもの」との関係性の視点から、幼児教育における宗教教育の意義を説明することができる。

- 宗教は不必要なもの？ 危険なもの？
- 愛や敬意、畏れや恭敬の念は宗教に基づくもの、宗教の一大テーマ
- 日本の幼児教育はキリスト教布教に伴って確立

幼児教育に宗教教育が必要な理由を
保育の歴史と我が国の伝統的な仏教思想を中心に考える

- 日本には特定の宗教をもっている人が他の国々と比べて少ない。
 - ・ 「特定の宗教をもっている」と答える人の割合は36.5%
 - ・ 「宗教は危ない」「信仰の強い人は公正な心をもたず、全体のためには尽くさないのではないか」
※藤原聖子（2011年）『世界の教科書で読む〈宗教〉』（筑摩書房）
- 宗教の正邪を学校教育で教えないことが宗教にたいする意識を育てないのか？
 - ・ 反社会的宗教カルトに容易に魅せられてしまう原因？
※山口和孝（1998年）『子どもの教育と宗教』青木書店
- 幼児教育に宗教教育が必要？
- 大江真道（日本聖公会司祭）の「宗教と保育」

1. 「子どもは大人から愛と敬意をはらわれることにより自分の人格を意識し、自分の人としての尊厳を自覚して自分自身を尊重するようになる。」
2. 人間を「限りある弱い人間」と定義し、「今の自分を超えて大いなるもの、永遠の実在者・真理と一体になることを願う」「生きるものはすべて大いなるものの愛・保護を必要としている」

※大江真道（1992年）「宗教と保育」西頭三雄児・林陽子編著『保育原理』福村出版

- 子どもと大人の関係性：信頼関係
- 人間と「大いなるもの」との関係性：畏れや恭敬の念

- 現代社会ならではの理由 1：多文化社会
 - ・ 異文化を背景に持つ幼児の急増
 - ・ 多様な宗教の共通点と相違点を知っておく必要がある
- 事例：ヒンドゥー教の家庭に育った子どもが、幼稚園で牛肉を食べない
 - ・ 当事者である幼児の宗教に対する理解を持てるかどうか
 - ・ 他宗教への理解をさらに深める必要がある

- 現代社会ならではの理由 2：子どものうつ病

- 学齢期の子ども、幼児のうつ病

※栗原祐司、森真佐子著（2006年）「第四章 発達障害と査定 六節 子どものうつ病
『海外で育つ子どもの心理と教育—異文化適応と発達の支援』 金子書房

- 「心」をどのように捉えていくか：宗教が扱う重要なテーマの一つ

- 心理学や精神科が担当する心のケア
- もともとは「神による心のケア」⇒「人間（医師）による心のケア」

※山折哲男「危機と日本人」No.19（日本経済新聞連載）

子どもたちを自信を持って育てられているだろうか？

- 戦後、我が国の価値観は大きな転換
 - ・ 西洋思想に基づく自由の概念：我が国の人々の考え方を解放
 - ・ 自由の概念は表面的なもの、責任を伴わない自由
- 我が国では、子育てにも思想的な拠りどころがない
 - ・ 「特定の宗教をもっていない」と自己認識する人々が多い
 - ・ 拠りどころになるものの一つが宗教一般

- 幼児教育に宗教教育が必要な理由
 - ・ 子どもと大人の間の愛と敬意に基づく信頼関係
 - ・ 人間が「大いなるもの」に抱く畏れや恭敬の念
 - ・ 他宗教への理解
 - ・ 「心」というものの理解
 - ・ 子育てにおける信念
 - ・ など
- すべて宗教や宗教教育が網羅するテーマ
- 寺院やキリスト教教会による運営の幼稚園に多く依存
- 明治期にフレーベル式幼稚園（キンダーガルテン、Kindergarten）の導入

- 幼児教育の祖ドイツのF・フレーベル（1782－1852）
 - ・ 幼児教育施設を設け、Kindergartenの名称を案出
 - キリスト教に基づく幼児教育
 - ・ 子どもが神によって創造され、神の恵みのもとに生かされる存在
 - ・ 幼児期における宗教を重要視
 - ・ 礼拝
 - ・ 聖書のことばやそのメッセージを聞く経験
 - ・ 感謝、喜び、悲しみ、こころの思いを共に祈る経験
 - ・ 保育者の祈りに支えられて受け容れられていることを感じる経験
- ※社団法人キリスト教保育連盟（2000年）『改訂キリスト教保育指針』



- フレーベルの万有在神論

- ・ 万物はすべて神によって支配され、自然の中にも神的生命が躍動している
- ・ 日本の「八百万(やおよろず)の神」（自然のものすべてに神が宿っている）の思想
- ・ 中国仏教「山川草木有仏性（山川草木悉く（ことごとく）仏性有り）」の考え方

- 似た思想が日本に根付いていたから万有在神論が受け容れられやすかった

- 関信三（1843 - 1879、教育者、浄土真宗僧侶）

- ・ フレーベルの考案した教育遊具（Gabe・Gift）、子どもの神性を無意識的に自己発展させ顕現させるための積木の遊具を「恩物」（仏教の思想である「報恩」の「恩」）

※柳城学園百年史編纂委員会（2004年）『柳城学園百年史』一誠社

幼児教育とキリスト教 キリスト教保育の理念と歴史

- アメリカ：マーガレット・メイヤー・シュルツ（1832-1876）が1856年に幼稚園設立
- カナダ：オンタリオ州をはじめとして、アメリカ経由で幼稚園制度を取り入れた
※柳城学園百年史編纂委員会（2004年）『柳城学園百年史』一誠社
- 日本のキリスト教保育（小林恵子の分類）
※小林恵子（1988年）「キリスト教保育の歴史」 社団法人キリスト教保育連盟
『新・キリスト教保育者必携』

1871（明治4）年	草創期	婦人宣教師によるキリスト教幼稚園の開設
1899（明治32）年	確立期	レーベル著『人の教育』出版、 フレーベルの教育精神が保育界に広く普及
1926（大正15）年	普及期	日本人のキリスト教保育者を中心として「基督教保育連盟」が発足
1947（昭和22）年	展開期	保育の手引書である「保育要領」「幼稚園教育要領」 「保育所保育指針」が刊行

- 明治期にかけて西欧思想が導入
 - ・ 子どもの発達理論や権利としての保育等の近代保育指導
 - ・ 近代科学を背景にもつ啓蒙思想によって子どもの文化が発達
 - ・ チャペルでのお祈りやクリスマス礼拝等
- 寺院と幼児教育
 - ・ 寺院に子どもたちが集まり、そこで時を共に過ごすという習慣
 - ・ 宗教的な空間には静寂感が漂い、凜とした空気がある
 - ・ 四季の行事の中に、釈迦の誕生を祝う仏教行事（花祭）
 - ・ 幼児教育における宗教的行事：情操教育

幼児教育とキリスト教 宗教に直接に言及しない「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」

- 「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」：我が国の政教分離を反映（宗教について直接的に言及しない）

1956年（昭和31年）	「保育要領」を改訂し、幼稚園教育の内容に関する基準書として「幼稚園教育要領」を制定 保育内容について、小学校との一貫性がもたされ、目標が具体化され、指導上の留意点が明らかに（教育の組織化）
1964年（昭和39年）	小学校・中学校・高等学校の「学習指導要領」が改訂されたのに従って、「幼稚園教育要領」も改訂 前要領よりも心情面を重視
1965年（昭和40年）	文部省と厚生省の間で幼稚園と保育所との教育をめぐる問題について話し合い 保育所は保育向上を目指し「保育所保育指針」を作成

幼児教育とキリスト教 宗教に直接に言及しない「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」

1989年（平成元年）	「幼稚園教育要領」改訂（25年ぶり）
1990年（平成2年）	「保育所保育指針」改訂
1998年（平成10年）	「幼稚園教育要領」改訂
1999年（平成11年）	「保育所保育指針」改訂
2006年（平成18年）	教育基本法の改訂
2007年（平成19年）	学校教育法の改訂
2008年（平成20年）	「幼稚園教育要領」および「保育所保育指針」告示 この改訂は、生きる力の基礎を育成すること、豊かな心と健やかな体を育成することを基本的なねらいとした
2017（平成29）年3月	「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が告示、2018（平成30）年度より実施

- 「幼稚園教育要領」
 - ・ 人とのかかわりに関する領域「人間関係」
 - ・ 身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」
- 「保育所保育指針」
 - ・ 「信頼関係」や「環境」
- 宗教に基づく心情
 - ・ 「人間関係」における愛
 - ・ 「環境」における宗教的環境
 - ・ 宗教ということばが使われなくとも教育において重要

- 「子ども—大人」関係と「人間—「大いなるもの」」関係
 - ・ 大乘仏教の思想に基づき検討
- 「子ども—大人」関係における、愛と敬意に基づく信頼関係
 - ・ 孔子の「仁」、墨子の「兼愛」、キリスト教における「愛」、仏教における「慈悲」にまつわるテーマ

幼児教育と仏教思想 信頼関係を基礎づける宗教的愛

一般的な「愛」：以下の混合的概念	
仁	家族愛に基づき、それを他人への愛へ拡大していくもの
兼愛	血縁を超えた無差別平等の愛 国家間の戦乱を収拾するための政治的手段
キリスト教的「愛」	神に対する愛である「アガペー」
	「あなたの隣人をあなた自身として愛せよ」として知られる「隣人愛」
仏教の「愛」 (特に否定的側面)	「渴愛」等と表現し、憂い、悲しみ、あるいは悩み等は、独占欲や限定された愛から生じるものであると警鐘を鳴らす。
慈悲	「愛の純粹化されたもの」「憎しみに移行することのない愛」

※中村元（1956年）『慈悲〈サーラ叢書1〉』平楽寺書店

- 仏教經典に、比喩的に、
幼児に対する大人の関わり方について、
父親を仏に例えて描く逸話がある
- 大乘仏教經典の一つ
『妙法蓮華經（みょうほうれんげきょう、法華經）』
※坂本幸男・岩本裕訳注（1976年）
『法華經』（上）（中）（下）、岩波書店



- 『法華經（ほけきょう）』
 - 紀元前後に成った
 - インドから中国を経て我が国に伝わった仏教經典
 - 初めて注釈を施したのは**聖徳太子**（574－622）
 - 天台宗と日蓮宗が重視する經典
 - 天台宗が日本仏教の淵源⇒日本仏教の本流の經典の一つ



- 「良医治子（ろういじし）」の話（「如来寿量品（によらいじゅりょうほん）第十六」より）
 - ・ 父親が家を離れている間に、子どもたちが毒のために苦しんでいる。
 - ・ 父親が帰ってきて、子どもたちに良く効く薬を与えた。
 - ・ ある者は、直ちにその薬を服用して苦しみから解放された。
 - ・ ある者は薬を気に入らず服用しなかった。
 - ・ 子どもたちに薬を飲ませるために、父親はしばらく家を離れて、自分が死んだことを子どもたちに伝える。
 - ・ 頼るべき人がいなくなった状態で、薬を飲むに至るであろうという考えから。
 - ・ 予想通り、始めは薬を嫌がっていた子どもたちも、薬を服用し苦しみから解放された。

幼児教育と仏教思想 仏教經典に描かれる「子ども—大人」関係

- 病人の子どもたち ⇒ 人間の人生が苦であることをたとえた仏教的世界観
- 良薬によって病気が治る ⇒ 苦からの解放の可能性
- 良薬 ⇒ 心の病を治す薬、正しい智慧と慈悲
- 父親が使った方便
⇒ 真理に誘い入れるために仮に設ける教えを意味



「長者窮子(ちょうじゃぐうじ)」の話（「信解品（しんげほん）第四」より）

- 父のもとを離れて息子が放浪する間に、父親も他国へ移住した。
- 現在父親が住む都に、放浪の末に息子がたどり着いた。
- 父親は莫大な金銀財宝を所有し、豪勢な暮らしをしていた。
- 息子は、恐れおののき、逃げ去ろうとした。
- 父親は息子に、自身の莫大な財産を相続させたいと願った。
- 自身が父親であることを誰にも明かさず、息子に仕事を与えた。
- 父親は息子とともに汚れた格好で仕事をした。
- 自分の死期が近づいたことを悟ると、自分が父親であることを告白し財産を譲渡した。
- ここでの財産は比喩的に徳を表している。

幼児教育と仏教思想 仏教經典に描かれる「子ども—大人」関係

- 「子ども—父親」関係は、「子ども—大人」関係に引き伸ばして考えることができる。
 - ※キリスト教においても、新約聖書の中で、イエスが神をわが父と呼び、彼の下に集まったイスラエルの人々に対して神を「あなた方の父」と語っている点は、キリスト教と仏教の類似点の一つとしてあげられる。
 - ※児玉衣子（2001年）『聖書の子ども観』青山社
- これらの話は、**真の愛や敬意について考えるきっかけ**を与えてくれる。
- 真の愛や敬愛は、その瞬間に子どもを甘やかすだけのものではない。
- 溺愛は思春期の非行の原因になるとも言われる。
 - ※小田豊、湯川秀樹編（2003年）『保育内容環境』北大路書房
 - ※相部和男（1988年）『非行の火種は3歳に始まる』PHP文庫
- 一時的に寂しい思いをさせてでも、子どもの病を治すことがその子どものためになる。
- 一緒に作業に励んで一人前にさせることが、その子どものためになる。
- 仏教では、**将来の最善を見越した上でのそこに至る手段**のことを「**方便**」と呼ぶ。

- 自分を応援してくれる身近な大人が存在（たとえ一人でも）
 - ・ 子どもの心の中には清く正しく生きていこうとする勇気が湧いてくる
- 他者からの愛や敬意は、自己の中に強い希望を生む
- 子どもへの愛と敬意：子どもの立派な成人への成長を願う姿勢の表れ
 - ・ 時には働きかける形をとり、時にはあえて働きかけない形をとり
- 「渴愛」：大人の都合で子どもを愛すること
- 「慈悲」：子どものために第一に考える愛、子どもと大人の信頼関係と安心感を生む

- 「大いなるもの」
 - ・ 見守られていることを信じる時に、精神的な安定をもたらす
 - ・ 子どもと大人との関係が上手くいかない、心が通じ合わない時、心の大きな支えとなる
 - ・ キリスト教では「畏れ」、仏教では「恭敬」と呼ぶ
 - ※海谷則之（2011年）『宗教教育学研究』（法蔵館）
 - ・ 「畏敬」と「恭敬」をきちんと区別し論じ、仏陀は尊敬の対象ではあっても「畏敬」の対象ではなかったと指摘しながらも、両者に共通するものとして「生きとし生けるものに対して謙虚に尊敬する心と態度」をあげている。
- 自己反省を促す重要な感覚

- 煩悩（ぼんのう）
 - ・正しい判断を妨げる精神作用を意味する
 - ・仏教が戒める心の働き
- 幼児は、心が瞬時にころころと変化する（ふてくされる、怒る、など）
 - ・機嫌良く仲間と遊んでいても、わずかな意見の食い違いで機嫌を損ねる
 - ・自分の思い通りにならないことが起こると、感情を理性によって抑えることができない
 - ・身体への影響を東洋医学が指摘（精神の病が身体の病を呼び起こす）

- 三毒：「貪」「瞋」「痴」の三種の病的な心

※増谷文雄・金岡秀友著（2007年）『仏教日常辞典』太陽出版

貪(とん)	貪り（むさぼり）の心	自分の欲望と置かれた環境との狭間での苦しみ
瞋(じん)	自分の心に逆らうものに対する怒りの心	幼児同士の喧嘩における怒り
痴(ち)	愚鈍の精神作用	その場限りの自分の幸せのみを追求することによって招かれる結果的な後悔

真の自己反省とは・・・

- 自分の真の幸福を願ってくれる身近な他者や「大いなるもの」に対して、
心の底からわき起こってくるもの

真の宗教教育とは・・・

- 幼児が自らの過ちを、心底恥ずかしく思い、申し訳ないと感じられるような教育

広義の宗教教育の核心 愛や敬意、畏れや恭敬の念

三 徳	三 毒
慈悲―他者に対する心遣い	貪―貪り
至誠―誠心誠意の慈悲と堪忍	瞋―愚鈍の精神作用
堪忍―怒りや憎しみを持たない	痴―自分の心に逆らうものに対する怒りの心

- 大人からの愛や敬意を享けて育ち、畏れや恭敬の念を持つ環境の中で育ってきた子どもたちは、自ずと周囲の人々や生き物全体に対する慈悲心を持つ
- 他者への思いやりは義務的に持たせるものではなく、心の底から自然とわきあがるものでなければ、どこかで無理が生じる
- いかにして子どもたちを幸福にできるだろうか、という覚悟と熱意を持つことにこそ、宗教教育の核心がある

終わり

